

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 27 日現在

機関番号：32652

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25380253

研究課題名(和文)日本における女性と経済学

研究課題名(英文)Japanese Women Encountering the Economics

研究代表者

栗田 啓子(Kurita, Keiko)

東京女子大学・現代教養学部・教授

研究者番号：80170083

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：第1に、1918年に開始された女子高等教育における経済学教育について、以下の3点の歴史的意義を確認した。(1)教養教育の一環として近代社会における女性の自立を支える社会理解の提供、(2)家庭生活を合理的に運営する能力の開発、(3)高度職業人としての女性の育成。

第2に、1922年に東京女子高等師範学校で「家事経済」の講義を始めた松平友子が日本初の女性経済学者であることを発掘し、彼女を起点とする家政学部における経済学の現代に至る系譜を明らかにした。また、竹中恵美子による労働経済学は、家事労働という無償労働と労働市場の関連を明らかにし、男性とは異なった視点が新たな経済学を構築する可能性を示した。

研究成果の概要(英文)：The first result of our investigations is finding 3 social functions of the economic education for Japanese women begun in 1918: a part of Liberal Arts which lead Japanese women to a better understanding of the civil society beginning in Japan; a part of Home Economics which develop their capacity to manage their home in the rational way; a part of professional education which may offer them a higher estimated and remunerated profession.

Our second result is determining, as the first Japanese female economist, Tomoko MATSUDAIRA (1894-1970) who inaugurated the course of "Housekeeping" Economics in 1922 and founded the base of Home Economics in Japan. We analyzed the works and practice of a labor economist, Emiko TAKENAKA(1929- ). She pointed out the hidden relation between housekeeping work without market value and women's weak position at labor markets and so influenced greatly women's social movements. These are the theoretical and practical feature of female economists.

研究分野：経済思想史

キーワード：経済思想史 日本 女性 経済学教育 女性経済学者 家庭経済学

## 1. 研究開始当初の背景

### (1) 現代からの問題設定

2013年に日本政府は、いわゆる「女性の輝く社会の実現」を政策目標として掲げたが、2014年の『世界男女格差報告書』によれば、日本の男女格差指数は142ヶ国中、全般的状況に関して104位、経済領域において102位と、非常に低いランクに止まっている。このような状況において、女性と経済学のかかわりの歴史的な研究の現代的意義は明白である。

### (2) 学術研究としての問題設定

経済思想史研究において、「女性と経済学」は全く新しい問題設定と言える。女性経済学者に関する歴史的研究は、少数の欧米の事例が見られるだけで、日本では類を見ない。本研究の構想は、研究分担者の松野尾が日本経済思想史の授業で女子学生から「日本には女性の経済学者がいなかったのですか」という質問を受けたことに始まる。ここから出発し、研究代表者・分担者は、日本人女性経済学者の発掘にとどまらず、女性に対する経済学教育の理念と実態、さらにはその社会的意義を検討する研究をほぼ3年間継続してきた。本研究は、その成果を踏まえ、さらに発展させるものである。

## 2. 研究の目的

本研究は、「日本における女性と経済学」という、これまでに研究されたことのないテーマを設定し、日本の女性がどのように経済学に出会ったのか、その出会いによって女性と社会との関わりがどのように変化したのかを、経済思想史の観点から明らかにしようとするものである。論点を「女性に対する経済学教育」と「女性経済学者」の2つに置き、歴史的展開と現代における展開の双方を視野に入れながら、以下の2点を明らかにすることを目標としている。

(1) 第1の論点「女性に対する経済学教育」については、つぎの2点-経済学教育を通じて、男性・女性を問わず、人々はどういう女性を育てたいと期待したのかという「女性への視点」の変化・新しさを抽出する、さらに、新しい女性像は新しい社会の構想をともなっていることを明らかにする-を目的とした。

(2) 第2の論点「女性経済学者」については、女性が経済学に係わることによってどのように既成の経済学を変えてゆく論点が提出されたのかを検討し、男性とは異なった「経済学への視点」が新たな経済学を切り開く可能性を導出することを目的とした。

## 3. 研究の方法

(1) 検討対象とする時代を大正リベラリズムの時代と第二次大戦の戦後から現代までの2区分とした。資料としては、女性経済

学者の原典および各種女子校の年史、さらに現代の女性経済学者たちと周囲の労働運動に関わった女性たちへのインタビューを検討した。

(2) 資料の分析においては、以下の3つのアプローチを採用した。文献資料に関して理論・概念を分析する理論史のアプローチ、年史や経済史料などを用い、思想のひとつの源泉を社会環境に見いだす社会史のアプローチ、女性という社会的存在を意識するジェンダー的アプローチ。これらの多様なアプローチを、検討対象の特質に応じて、組み合わせることによって、複眼的な分析が可能になった。

## 4. 研究成果

(1) 第1の論点「女性に対する経済学教育」については、松野尾裕(研究分担者)が、女性の新しい生き方が追求された1910-20年代に発表された山川菊栄の論説に基づき、日本のこの時代に、女性が経済学と出会う必然性が醸成されてきていたことを提示した。この社会的背景の解明を受け、女性に対する経済学教育の以下の3つの機能を確認することができた。

第1は、教養教育の一環として、女性の自立を支える社会理解を提供する機能である。この第1の機能について、生垣琴絵(研究分担者)が大内兵衛の『婦人の経済学』を取り上げ、市民としての女性の育成における経済学の役割を指摘した。栗田啓子(研究代表者)は新渡戸稲造と安井てつを対象に、女性に対するリベラル・アーツ教育における社会認識のツールとしての経済学の意義を明らかにした。この機能に関しては、明治初期の男性に対する市民教育としての経済学という位置づけとの類似性を指摘することができる。この認識に基づいて、生垣は、市民教育の一例として、森本厚吉の通信教育「文化生活」を検討し、新しい社会認識の育成と家庭生活の合理化が深く関連していることを解明した。この通信教育を森本が大学普及事業と位置づけていること、新渡戸稲造も民衆大学事業を展開していることを考え併せると、市民に対する高等教育と女子経済学教育の必要性の認識が共有する思想的基盤が存在することが確認できた。

第2は、家庭生活を合理的に運営する能力を育成する機能である。生垣の森本厚吉研究は、森本が消費経済学の確立を通じて、この第2の機能を目指したことを明らかにした。そのうえで、森本が、経済学の知識を獲得した女性が家庭生活の改善から社会の改善に向かう道筋を理想としたことを示し、女性に対する経済学教育が新しい社会の構想(実質的な社会の近代化)と密接に関連していることを証明した。さらに、この第2の機能は、第2の課題である女性経済学者研究における家庭経済学の系譜(松平友子-伊藤秋子-御船

美智子)の解明でも指摘されたように、家政学部の経済学の特徴でもある。

第3は、女性に高度職業人への道を開く機能である。栗田は東京女子大学卒業生の進路を検討することによって、女子経済学教育が実際に高度職業人(企業、官庁、社会事業)を生み出したことを明らかにした。松野尾は、東京女子大学などの事例を分析し、女子経済学教育が学生の社会運動への参加を促した可能性を指摘した。栗田は、それが同時に、女性の社会事業への関心を育んだことを見だし、大正期の社会事業における女性の活動を評価する視点を提供した。

(2)第2の論点「女性経済学者」に関しては、松平を起点とする家庭経済学の系譜を明らかにした。まず、松野尾が、松平友子が女子高等師範学校から東京大学に経済学研究のために派遣され、母校に戻って「家事経済学」を講義した日本で初の女性経済学者であることを発掘した。また、彼女の「家事経済学」の理論的内容を分析し、松平が家庭・家族における主要な関心事である家事労働や消費生活に関する社会科学的研究を開始させ、それらが無償労働としての家事労働や家庭における再生産の評価といった現代に通じる問題意識を持ったものであることを示した。

上村協子東京家政学院大学教授の協力を得て、松平の家事経済学を継承した伊藤秋子と御船美智子の家庭経済学を検討し、従来家政学部の特殊な経済学と見なされ、既存の経済学と分断されてきた家庭経済学を、はじめて経済学の歴史の上に正当に位置づけることが可能になった。また、家庭経済学分野の女性経済学者たちが、既存の経済学に代わる「オルタナティブな『生活者の経済』学」という新たな経済学の構築を目指していることも明らかにされた。

女性経済学者の分析のもう一つの領域として、家庭経済学とは異なって、既存の経済学の領域に含まれるものの、女性経済学者を多く擁する分野である労働経済学を選択した。そして、この領域における女性経済学者の代表例として、竹中恵美子大阪市立大学名誉教授を分析対象とした。自身が後述の「対談」で語っているように、竹中が舞台にした労働経済学・労働市場論が女性に許された数少ない経済学の領域であったことの重要性に着目し、そのマージナルな立ち位置が逆に家事労働という無償労働と労働市場の関連を明白にするという研究成果をもたらしたことを明らかにした。文献研究と併せて、竹中へのインタビュー(「対談」)の分析を行い、竹中の労働理論(とくに同一労働価値同一賃金の主張)と関西の女性労働運動とが相互に影響を及ぼしあいながら展開されてきたことを解明した。その結果、元大阪総評オルグの伍賀偕子氏に協力していただき、勉強会などを通じて竹中理論が女性労働運動の現場に及ぼした影響を分析し、女性が活動の中心

を占めることによって可能になった理論と実践の相互作用を浮き彫りにした。

(3)今後の課題としては、本研究課題が都市住民の視点を優先させてきたことに対して、農村住民の視点を意識する必要性を認識し、農村女性の立場を強調した丸岡秀子の生活経済論の分析を開始した。また、女性に対する経済学教育が新たな市民教育でもあったという認識から、教育機関によるものではない、社会教育としての女性に対する経済学教育のあり方の検討と、経済学教育を受けた女性の社会運動あるいは社会活動の様態を分析するという課題を設定した。

(4)資料的整理としては、上記の竹中恵美子と開発経済学の村松安子(東京女子大学名誉教授・故人)の「対談」と、松平友子晩年期の教え子亀高京子(東京家政学院大学名誉教授・故人)の「聞き書き」をまとめた。前者は戦後早い段階で経済学に関心を持つということが、戦前の旧弊な社会慣習に対する女性の立場からの批判や戦争経験に対する内省に基づいていたことを明らかにした。後者は、松野尾が、日本初の女性経済学者であった松平友子の最後の学生である亀高氏へのインタビューの分析を行い、松平友子の人となりと教育実践を明らかにした。この「対談」と「聞き書き」は、栗田・松野尾・生垣編著『日本における女性と経済学-1910年代の黎明期から現代まで』(北海道大学出版会、2016年)に掲載した。これらの資料は、経済学を学んだ女性たちによる一種の自分史としても、また、経済学教育や経済学界に対する女性からの評価としても高い資料的価値を有している。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

松野尾裕「丸岡秀子の生活・家計研究-その思索の根幹について」『経済学史研究』57巻2号、査読有り、1-24、2016

生垣琴絵「森本厚吉の消費経済学」『経済社会学会年報』35巻、査読有り、115-125、2013

松野尾裕「竹中理論と経済学の革新」、竹中恵美子著作集完成記念シンポジウム『竹中理論の意義をつなぐ』報告集、査読なし、21-25、2013

[学会発表](計5件)

生垣琴絵「森本厚吉の「文化アパートメント事業」-社会事業としての意義を探る」経済社会学会関東部会、2014年12月13日、早稲田大学(東京都新宿区)

生垣琴絵「20世紀初頭のアメリカにおける女性と経済学：ホームエコノミクスを介して」経済学史学会全国大会、2014年05月25

日、立教大学(東京都豊島区)

栗田啓子「女性と経済学」経済学史学会全国大会、2014年05月25日、立教大学(東京都豊島区)

松野尾裕「丸岡秀子の生活経済論-農村女性への視座に焦点を当てて」経済学史学会全国大会、2014年05月25日、立教大学(東京都豊島区)

生垣琴絵「20世紀初頭のアメリカにおける女性と経済学」経済学史学会北海道部会、2013年12月07日、北海学園大学(北海道札幌市)

〔図書〕(計1件)

栗田啓子・松野尾裕・生垣琴絵『日本における女性と経済学-1910年代の黎明期から現代へ』北海道大学出版会、2016年3月31日、vi+328ページ

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

栗田 啓子 (KURITA Keiko)

東京女子大学・現代教養学部・教授

研究者番号：80170083

### (2)研究分担者

松野尾 裕 (MATSUNOO Hiroshi)

愛媛大学・教育学部・教授

研究者番号：30239058

生垣 琴絵 (IKEGAKI Kotoe)

小樽商科大学・教育開発センター・学術研究員

研究者番号：90646093